

蚊喰鳥

森岡 正作

身のうちに

望郷の渴きに似たり麦の秋
打ち返したき郭公のストレート
翡翠のひと羽搏きに水を脱ぐ
蚊喰鳥夕べのことに白を切る
海月飼ひ電波障害疑へり
夏草のそこだけ刈られ芭蕉句碑
父の日と言はねば誰も振り向かず

〈身のうちに螢棲む闇あらまほし〉
という登四郎先生の御句は、第十三
句集『芒種』に載っているので八十
七歳頃の作と思われる。何か幽冥界
に居られるような雰囲気であるが、
この頃の先生は夢か現か幻かという
どんな境地にでもなられたのであろ
う。確かに螢火を見据えていると、
いつしか無我の境に誘われる自分
はつと気づかされることがある。

七、八歳の頃は夏休みになると、
いとこ達が遠くからやって来ること
が待ち遠しく、来ると鰍を獲ったり
螢を捕ったりしたもので、螢の場合
は夜になると蚊帳の中に解き放って
皆で遊んだものであった。上部が青
で裾の方が白い蚊帳は山国に海の一
画があるようで楽しかった。大学に
入って帰省した折には、母がその蚊
帳を出してくれたもので、三好達治
の〈水に入るとくに蚊帳をくぐり
けり〉の句のように涼しい心地であ
った。螢と蚊帳はつきもので母の思
い出にもつながるのである。